

Title	十六世紀ネエデルラントのカルヴィン主義：近世欧羅巴資本主義成立期に於ける宗教思潮
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.6 (1934. 6) ,p.907(143)- 938(174)
JaLC DOI	10.14991/001.19340601-0143
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340601-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

芝、淺草の三區のものには、最新の地圖にない舊町名が多く出て來た。之れは最新地圖、舊地圖、又は市内電話帳等を利用して、新町名に訂正する事にとめた。しかし神田區に於いては、如何とも仕方のないものがあるので其の儘とした部分が多くなかつた。町名改正に就いての資料を東京市役所に求めたが早速得られなかつたのも遺憾であつた。此の點は他日の補正を期するつもりである。

(昭和九年五月十一日)

十六世紀ネエデルラントのカルヴィン主義

——近世歐羅巴資本主義成立期に於ける宗教思潮——

高 村 象 平

近世歐羅巴資本主義の萌芽期は、十二世紀乃至十五世紀の伊太利をその最も華々しき舞臺として出現して居る。然し、この萌芽期を規定しそして特徴づけるものは、その幼萌と云ひ或は擡頭と云ふ言葉によつて容易に知り得る如く、清新さと幼弱さとの二つの面を持つ階級分化でしかなかつた。即ち端的に云ふならば、不十分なる階級分化がそれであつた。例へば、その農民運動を原因として惹き起されたところの、封建領主の支配を排したフイレンツ、の都市共和制を見るならば、まさしくそれはその清新さを證するものであつた。だがそれはまた同時に、この擡頭期に於ける他の一面たる幼弱さを示すものであつたのである。と云ふのは、この都市に於ける商人代表者の市會支配も、やがてはこれ等「都市貴族」と「貴族及び僧侶の同盟」との妥協を生むに至つて——これは市民的反對と農民・平民的反對との間の背反である——、それは殆ど上層的な一變化に過ぎぬものと化したことが顯はにされたからである。そして、この過程と略、同じものが、フイレンツ以外の伊太利諸都市に於いても行はれたのであつた。

断るまでもなく、一つの生産關係たる封建主義に對する、他の二つの生産關係資本主義の代替は、これを可能ならしめる現實的地盤が十分に準備され、またこの社會的・經濟的諸事情の成熟が、封建的生產關係内部に於ける諸矛盾相互間の闘争によつて促進せしめられて、はじめて決定的となる。一言にして云へば、封建的生產關係の内部的諸矛盾が深化し、これに對して資本の、即ち商業資本乃至利附資本の侵略が加へられ、従つて封建的支配者の經濟的衰退と、新たな經濟的發展に伴つて新たな外衣を纏つた農民及び都市階級の、自由獲得の爲めの闘争の成長とが、近世資本主義的生產關係の確立に貢獻する基本的要求である。このことの闡明を缺くときは、何故に上記伊太利に於ける近世資本主義の先驅が、單にその若き芽萌えのまゝでむしろとられてしまつたかの理由が不明となるであらう。即ち右の都市共和制が、初期の謂ゆるブルジョア革命の十全なる様相をとることが出来なかつたことに對しては、この場所とこの時代とに於ける階級分化が不十分なものでしかなかつたことを以つて解答とせねばならない。まさにこの事實こそ、右の伊太利をして近世資本主義成立の爲めの最初の舞臺としながら、尙これを僅かにその端緒として置くに止まらしめた根源であつたのである。

それ故に、吾々は近世資本主義制度への變革が、眞に用意され醸成されそして遂に確立されるに至つた時と處とを、十二乃至十五世紀の伊太利以外に求めねばならない。それを追ひ求めて立てられた數多くの論證を列擧することは茲で必要としないが、要するに近世資本主義的發展への途が確立せられたものとして指示されるのは、十六世紀後半のネエデルラント、十七世紀中葉に於ける英吉利であり、さては十八世紀の佛蘭西であるといふ如く、國民的表現に基くところのものである。素よりそれが謂ゆる國民的表現であるからには、右の三つの形態を検討するならば、等しくブルジョア解放闘争の一段階として現はれたといふ共通點を有しながらも、尙それ等は個々の色彩を以つて色どられてゐることを看過し得ないであらう。即ちこれを端的に云へば、先づ右の中で前二者は、その歴史的推移が宗教的色彩を帯びて居るに反し、最後のものはさうでない。然し乍らこの相違は前二者が宗教的欲求から生じたところのものであり、後者は然らずとて説明せらるべきものではない。前二者が右の如き特徴を帯びるのは、「宗教と神學以外の他のイデオロギイの形態を知らなかつた中世」の事情に基くものと云はねばならないのである。然るに、「ブルジョア」が十八世紀に十分の勢力を確定し、彼等の階級的立場に適合した彼等自らのイデオロギイを持つに至ると、その偉大にして決定的革命たる佛蘭西革命を、専ら法律的・政治的觀念に訴へただけで成就したのであつた。そして宗教が自分の進路の邪魔になるときにのみ、これを問題としたに過ぎなかつた。けれども彼等には舊宗教の代りに新宗教を置き代へようといふ心も起らなかつたのである⁽¹⁾。

更にネエデルラントの國民的形態と英吉利のそれとを對比するならば、それ等が上述の如く宗教的色彩を帯びて居るといふ點では相似て居ながらも、尙それ等が近世歐羅巴資本主義的發展上に於いて占める重要さは嚴密には同じでない。このことは西班牙の主權に對するネエデルラントの蜂起の長い經過の後、一六四八年遂にこの兩者の間に平和が締結された時に於いて、ネエデルラントの統一諸州の中で最も經濟的に有勢であつたオランダが、典型的資本主義國と看做され得る基本的特徴を備えたものであるにも拘らず、尙その資本主義的發展と名譽革命によつて、ブルジョア及び地主中のブルジョア的分子が勝利を得た一六八六年後の英吉利國內に於ける資本主義的發展とを比較對照するならば、明かにせられ得るところである。即ち抽象的な言葉を以つてすれば、後者の發達は前者のそれに立ち勝つてより、深刻であつた。それは名譽革命後英吉利の經濟的發展が、他の歐羅巴諸國のそれを急激に凌駕した諸條件の究明によつて明かにせられ得るのである。またそれは民衆の運動の強度からして考察せられ得るの

である。然しその具體的解明は、いづれ他にその場所を見出し得るであらうが故に、ここではこれに觸れないで置く。

斯くの如き相違のあることが認められ乍らも、尙右の三つの國民的形成のいづれに於いても、ブルジョアジイはその解放運動の頂點に立つて居た階級であつたのである。勿論その際すべての市民並びにプロレタリアト或は前期プロレタリアトが、ブルジョアジイに屬するものではなかつた。然しそれ等の部分は、何等ブルジョアジイと乖離する利益を持つわけでもなく、また何等獨立に發展した階級乃至階級部分を構成するわけでもなかつたのである。それ故に、彼等が、例へば佛蘭西に於ける一七九三年から九四年に至る場合の如く、ブルジョアジイに對抗する場合には、彼等は縱令ブルジョアジイとは行き方が違ふとは云ひ條、たゞ偏へにブルジョアジイの利益を貫徹せしめる爲めに戦ふのであつた。しかもこれ等のそれぞれの場所に於けるブルジョアジイの勝利は、「社會の或る一定階級の舊政治組織に對する勝利ではなく、それ等は、新歐羅巴社會の爲めの政治組織の宣言だつた」ことが注意せられねばならないのである。即ち「このブルジョアジイの勝利なるものは、當時にあつては、一つの新しい社會組織の勝利であつたのである」¹⁾。そしてそれは、その勝利を獲得せしめた經濟的地盤として、世界的商業の基礎と手工業のマニファクチュアへの推移・更にまたこの後者の近代的大工業への出發の基礎とが確立されたことを持つものであつた。それ故に、それ等は個々の國民的形成であるとは云ひ乍ら、尙それはそれに限られた意義のみのものではなく、歐羅巴に於ける近世資本制成立といふ國際的・世界史的出來事の標徴たるものであつたのである。たゞ資本制發展の不均等性の故に、一義的にその成立の時期を決定し得ず、茲に於いて右の如く謂ゆる國民的形成の諸形態を以つてこれに當てねばならないのである。従つて通常、近世「資本主義時代が開始せられたのは十六世紀以

來のことである」と規定され、また資本主義社會の發展を目して、「十六世紀以來準備され十八世紀に至つて成熟への巨歩を進めた」と概括されるのである。

扱て、斯かる生産關係を基幹として、その基幹の歴史的段階に照應して觀念形態が決定され、後者の擡頭も發展も停滯も、すべて生産關係の動向によつて規定されることは云ふ迄もない。資本主義社會の經濟的構成が封建主義的社會の經濟的構成から闘ひとられたものであると等しく、資本主義的乃至ブルジョアの觀念形態も、封建的觀念形態に對する闘争によつて成立し確定したものであるが、しかもこれもまた吾々は具體的には、右に掲げたブルジョアの生産關係が先づ以つて國民的形成を遂げたところの、十六乃至十八世紀のネエデルラント、英吉利、或は佛蘭西に於いて、同じくこれを求めねばならないであらう。

素より觀念形態の上に於ける近世的寄與として、普通擧示せられるものは、十五世紀の伊太利に於けるルネサンス及び十六世紀獨逸に於ける宗教改革である。然しながらこの新しい觀念的動向は、この時の伊太利に於ける、扱ては獨逸に於ける階級分化不十分なる經濟的構成の段階に照應し、そしてまたそれによつて規定せられたところの上部構造のものでしかなかつた。それ故にこそ、このルネサンス並びに宗教改革によつて、「教會の精神的獨裁は破毀され、ゲルマニア民族は、それを大多數は直接的に投げ棄ててプロテスタント新教を採用し、他方、ロオマ人の間には、アラビア人から繼承し、そして新たに發見されたギリシヤ哲學によつて培はれた明快なる自由思想が益々根を張つて、十八世紀の唯物論を準備した」²⁾のではあつたが³⁾、尙謂ゆるブルジョアの思想の成熟の爲めには、それは未だ十全なる地盤を擁して居るものでは無かつたのである。勿論、ルネサンスと云ひ、宗教改革と云ふ、それが進歩的變革であつたことに對しては何等疑ひを容れる餘地がない。然し、それが進歩的であり得たのは、その現實

的基礎として、農民・都市民の自由獲得といふ封建主義への抗争が置かれ、そしてルネサンスなり宗教改革なりがそれから發生し、またそれによつて規定せられて居たからであつた。しかもまたその他面に於いて、その階級分化が不十分な、そして幼弱なものであつたが故に、これ等進歩的變革も、その後には於いて暫らく沈滞するの止むなきに至らしめられたのであつた。斯くて吾々は、近世的即ちブルジョアの觀念形態の成立とその成熟とを、生産關係のそれと等しく、前記の諸國民的形成の行はれた段階に、これを求めるのである。

しかも、この國民的形成の歴史的時代に結びつけられた階級分化は、これもまた周知の如く、「労働者を労働條件から分離せしめるところの行程、換言すれば、一方には社會的生活資料及び生産機關をば資本に轉化し、他方には直接的の生産者を賃銀労働者に轉化せしめるところの行程」を、その社會的・經濟的地盤とする。即ちそれは、「生産者を生産機關から分離せしめる歴史的行程」に基づくものである。従つてこれをその基礎的條件として規定せられるこの觀念形態は、謂ゆる資本の本源の蓄積の段階に照應せるものであり、それは本源の蓄積の時代の特質を反映するものでなければならなかつた。斷るまでもなく、本源の蓄積なる收奪行程は、ブルジョア白らの行動によつて展開せられたものである。そしてこのことは、この歴史的行程を反映する觀念形態の形成に對しても等しく妥當することであらねばならない。即ち、ブルジョアの觀念形態も、その確立の爲めには、ブルジョア自らの行動を必要としたのである。ブルジョア意識の發展は、教會のまたは俗界の思想家の論議によつて押し進められたものではなく、また封建的觀念形態の自生的解體の結果生じたところのものでもなかつた。それはブルジョア社會が哲學的思索の産物では決してなかつたことと相似て居る。まさに、生産關係の變革に於いても、また思想の成長に於いても、「太初、行動あり」と云はねばならぬのである(4)。そしてこのことは、右に掲げた國民的形成の歴史的推移の中に於

いて明かに看取られるのである。

筆者は、右に述べた近世資本主義時代の開始せられた諸國民的形成のうち、先づネエデルラントのそれを探り、そしてこの場所に於けるその時の社會的・經濟的構造の分析と關聯して、觀念形態の動向を基督教思潮の發展の上に辿ることを志して居る。觀念諸形態の中より特に宗教思想をとり出した所以は、既に一言せる如く、資本主義社會に先行せる封建主義社會が神學的宗教的色彩を以つて限なく色どられて居たが故に、神學的束縛と宗教的抑壓とよりの解放の中にこそ、封建的生產關係の解體、従つて資本制的生產關係の形成に照應するところの最も明瞭なる觀念形態の發展を見出し得ることに存する。而して上來述べ来たところは、この筆者の企圖の遂行の上に一貫すべき、そしてその具體的分析の後に於いて明かにせらるべき、原理であると同時に結論たるものに外ならない。それ故に、近世資本主義時代の開始期に於ける宗教思潮の役割は、ひとりネエデルラントの國民的形成に關する考察のみを以つてしては十分なる理解に到達し得るものでなく、即ち更に英吉利の、及び佛蘭西のそれ等の究明を必要とする。然しこの三つの國民的形成の具體的解明の爲めには勿論のこと、ネエデルラントに於けるもののみでも可成りの紙間を要するので、本稿に於いては、この後者のうち僅かに資本主義的生產方法が導入され始めた十六世紀に於ける部分しか取扱ふことが出来ない。従つて、十七世紀に於けるネエデルラントの宗教思潮の變容に就いて、及び英吉利と佛蘭西とに於けるそれに就いては、すべてこれを他に機會の與へられた時に讓ることを記して、以つて讀者の宥恕を請はねばならない。

(1) エンゲルス、ルドキッヒ・フォイエルバッハと獨逸古典哲學の終末、改造社版全集十二卷、八九九頁。

(2) マルクス、プロシア革命の決算、改造社版全集四卷、一三六―七頁。

(3) エンゲルス、自然辯證法の舊序文、改造社版全集十四卷一一七頁。

(4) Vgl. Bernhard Groethuyzen, Die Entstehung der bürgerlichen Welt- und Lebensanschauung in Frankreich. Bd. I. Das Bürgertum und die katholische Weltanschauung. 1927. S. VIII-IX.

II

近世初頭、伊太利を除いた歐羅巴に於いて、最も多くの都市、従つて商工業地を有したのはネエデルラントであった。その地理的條件は、この地をして西歐に於ける交易上の交會點となし、以つて中間貿易を發達せしめる機縁を形成し、⁽¹⁾ フランダースの名と結んでよく記憶せられる毛織物業は、この國の貿易の發達を助長する一原動力であり、それはヴァレンシエヌヌ、カムブレエ、サン・オメル、リュエ、ドゥイ、イブル、ガン、ブルッヂエの諸都市を發達せしめ、他方マアス河地方の金屬加工業は、ディナン、ユイ、ナムゥル、リエヂエ、メストリヒト、ユトレヒト、ドルトレヒトの諸都市を發達せしめたのであつた⁽²⁾。これ等商工都市の著しい發展は、この國の農村に當然影響を及ぼさざるを得なかつた。即ち封建經濟の特徴たる自足的生産と農奴制とは、都市生活の著しく發達した右の諸地方に於いてその姿を消し、農民の分化は行はれて、豪農と並んで、所有地なき農民や、僅少な土地は有するも生計維持には不足なる爲め他に雇傭せられる者が現はれ、彼等は大農業や手工業に勞働力を供給したのである。然しながら、尙ネエデルラント全體に互つて農奴事情の分解が完全に行はれたのではなく、都市のあまり發達を見なかつた地方には、農奴制的土地關係が可成りの程度に於いて殘存して居たのであつた。従つて十六世紀に於いても、ネエデルラントの農村を支配するものは、その根本に於いては、半封建的土地關係であつたと云はねばならぬ(Seno)。

中世以來のネエデルラントの工業の最大特徴は、それが輸出工業であつたことである。即ち、ディナンの銅、フランダース及びブラバントの織物の一部が、地方的消費に當てられて居たのを除けば、他は殆ど輸出の爲めに製造せられて居た。しかもこの國が國際通商の中心地であつたことは、その工業生産物の品質の優良さと相俟つて、その市場を極めて廣汎なものたらしめ、斯くて工業生産に従事する者の數を絶えず増大せしめて居た。十六世紀初頭以來、この國の經濟的發達の中心地、従つて全歐羅巴商業の中心地となつたものは、周知の如くブルッヂエに代つたアントワープであつた。あの新大陸の發見と東印度への新航路發見とによる國際貿易の擴大と轉換との一劃期に際して、最も敏速に好影響を享けたのはネエデルラントであつたが、その時に當つて、その通商の中心地たり得た海港は、背後に工業地を控へ地理的位置に恵まれ都市の自由な空氣を多分に有したアントワープであつた。ハンザ同盟の商館設置、伊太利の銀行の開設、英吉利マアチャント・アドヴェンチュアラスの貨物集散地としての決定、洪牙利銅市場のヴェネツィアよりの移轉、葡萄牙政府の東洋香料貿易商館の設置、或は亞米利加銀の市場となり、南獨逸の諸商會社や諸銀行の金融取引が營まれるやうになる等、この都市はその巧みな開放政策と外國人保護政策とによつて、葡萄牙、西班牙、英吉利、南獨逸等の商人を來往せしめ、此處に居住する外國商人の數はアントワープ市民の甚だ大なる割合を占めたのである⁽⁴⁾。彼等はひとりアントワープに於いて自國商品の取引を行ふのみならず、その自國に在る商人との間にも事業關係を結んだ。またこの都市に於いて享受せられる自由は、幾多の投機的・企業的精神に充ち、富の追求に熱心なる冒險者を蝟集せしめた。斯くてこの地は單に貨物の集散地としてのみではなく、仲介取引の中心地として、更には金融の中心地としての繁榮さを與へられたのである。この卓越さの必然的結果として、アントワープはその近隣の諸地方を指導する地位を占取し、その近世的企業精神を、換言すれば自由主義的

資本家的精神を普及せしめたのであつた。

しかもこの間、アントワープの繁榮の他方に於いて、フランダース及びブラバントの諸都市は致命的危機に襲はれたのである。それは英吉利製品の競争に基くものであつた。英吉利の毛織物の年々アントワープに輸入される量は増大し、それを防止せんとするブルグンディ侯の努力も、その廉價なる前には全く無効であり、遂にネエデルラントの都市毛織物業はその存立を脅かされるに至つたのである。例へば一五四三年ガンに於ける織機は二十五臺が動かされて居るに過ぎず、一五三七年ブラッセルには一人の染物師も居なかつた⁽⁵⁾。しかもこの競争に對抗し、この致命的衰退より回復せんが爲めには、ネエデルラントの諸都市に於いて傳承せる斯業の舊組織・舊製法を再編成し、また從來とり來つた保護政策を犠牲とせねばならない。然しながらこのことを、傳統的方法に習熟しその視界の限られた小ブルジョアジイに期待するのは、不可能である。當然彼等は没落への途を辿らざるを得なかつた。

然し、この都市織物業の衰退に代つて、十六世紀の三十年代から農村に於いて織物業の急激なる進歩を見る。これは、それまで諸都市の諸特權行使によつて壓伏せしめられて居たのが、いまその束縛を解かれたからであつた。しかもこの農村織物業は舊來のギルド制によるもののみではなかつた。それと相並んで、そしてそれに比して數多く、資本の侵蝕的影響下に在る形態が行はれたのである。それはもはや昔日の手工業的形態のものではなく、マニファクチュアの形態のものであつた。まさに、ネエデルラントは英吉利織物に競争し得んが爲めに、英吉利に於いて行はれたと同じ産業形態上の轉化を経験せねばならなかつたのである。尙またこの織物業と時を同じくして轉形したものに、リエヂュ、ナムゥル、エノール等に於ける鐵鑛業や石炭業がある。またフランダースに於ける絨氈

製造があり、ウッデナールのリンネル工業がある⁽⁶⁾。これ等もすべて資本に従屬せしめられて特に急激に發達するに至つた産業部門であつた。それ等は、或はギルド的束縛から自由な新産業部門であり、或は舊來の手工業・家内工業的形態を以つてしては到底營むことを得なかつた多額の設備を必要とする産業部門であり、すべては時代の經濟的發展に應じた新組織の下に於ける企業であつた。然し乍ら、資本の農村への侵蝕はひとり農村工業に於いて顯はにせられる許りではなかつた。蓄積資本は、その捌け口を農業そのものにも當然見出した。その結果は、農民の土地喪失と彼等の浮浪者への、雇傭労働者への轉化である。かくて曩に規定した半封建的土地關係からの脱化が生ずることになつたのである。しかもまた農村工業の勃興時にあつては、これ等の農民も、都市工業の衰退に基く没落せる都市小ブルジョアジイと共に、農村工業労働人口を形成し得たのであつたが、やがてその過剰となるに隨つて、それはたゞ資本の好餌となる以外に遁路はなかつたのである。

他方、この經濟革命期に於ける都市人口は、資本家的諸關係の侵蝕によつて如何なる影響を受けたであらうか。第一に、都市に於ける特權賦與による産業の獨占はもはや過去の時代のものでしかなかつた。都市に於いてはその人口の給養に當る者のみが、即ち肉屋、麵麩製造者、鍛冶屋、轆轤師、指物師、桶屋、大工、靴屋、馬具師等の工匠が、尙特權的地位にあつた⁽⁷⁾。而してギルドを形成する彼等は、農村工業の壓倒的勢力の前に、その殘存せる作業領域、狹隘なる地方的市場の保持に努力し、その身分的秩序の嚴格なる固守に只管努めたのである。しかもこのことは、いづれの地方のギルドにも内部的對立とその深化とを招來せざるを得なかつた。即ち、一はその上層、それは謂はゞ都市貴族に等しく、ギルド代表權を獨占し、保護の蔭に利益を吸ひとするもの、他は下層、これは謂はゞ家内労働者階級であり、親方と仕事を分け持ちそして待遇せられては居たが、その生活狀態の改善の望みは全く奪は

れてしまつて居たもの、そしてこの二つのもの間に於ける對立である。

この他方に於いて、斯くの如き特權に包まれたギルドに對して、都市には、輸出貿易の進展に伴つて絶えずその活動を増大しつゝある新産業があつた。これは企業的精神に充ちた謂ゆる新興ブルジョアジイの營むところであり、そして彼等はブルジョアジイの中で最も富有であり且つ最も勢力あるものであつた。彼等は大商人であり、船舶所有者であり、金融業者であつた。彼等にとつては、その經濟的勢力に應じた社會的地位と、都市行政の支配及び立法權力への参加とが必要であり、彼等はこれを要求するのであつた。従つて彼等には貴族やギルド親方の有する一切の政治的特權や様々の制限が不満であつたのである。と云ふのは、十四世紀以來、市民權保有の資格に就いては何等變更を加へられるところがなかつたからである。例へばガンに於いてこれを見れば、その織物業の衰退ありしにも拘らず織匠ギルドは市會に於いて舊來の絶大なる權力を保持して居り、都市行政上、各ギルドの占むる地位は、彼等の過去のそれによつて秤量されて居り、或る産業部門が衰へようと榮へようとこれを代表するギルドは、嘗て獲得せられた權利を永久的に享受して居たのであつた(8)。この制度不變のまゝに、しかもその周圍の事情の全く一變したこの十六世紀に於いて、それは全く貴族主義的性格のものとなり變つて居たことは當然の成行である。即ち嘗て十四世紀に於いて平民の努力によつて都市の全人口に廣められた市民權は、いまやその極めて一部分に限られるに至り、都市は全く少數の特權所有者によつて左右せられて居たのであつた。

扱て、この謂ゆる新興ブルジョアジイの支配下には、財産なく特權なき賃銀労働者がその搾取の手に委ねられて居た。この後者に對しては、都市當局も國家も一樣に何等顧みるところなく、彼等は全くその運命の命する儘に翻浪されるやう放置せられて居たのである。この封建的團體及び市民的團體の圏外に在つた彼等の多數は、強制せら

れて働く乞食であり、また農村から職を求めて都市に流入せる者であり、それは全くの浮動的人口を形成するものであつた(9)。斯かる市民權を與へられて居なかつた都市居住者の多數の他に、この謂ゆる庶民に屬し一介の労働者と化したものとしては、没落せる市民があつた。そしてこれ等の孰れに於いても烈しい經濟的窮迫の中に生を營んだことは共通して居た。斯くの如くに、謂ゆる都市庶民は極めて雑多な要素から成つて居たのであるが、これを概約するならば、それは舊時の封建的ギルド社會の没落分子と、萌芽し始めた近代的ブルジョア社會に於ける、未だ發達するに至らないで漸く擡頭し始めた許りのプロレタリア的——前期プロレタリア的——要素との結合せるものであつたと云ふことが出來よう(10)。彼等の存在こそ、封建的ギルド的社會の解體の生ける徴候であつたのである。彼等の蒙れる經濟的窮乏を特に強めるにあづかつて力あつたものは、十六世紀に於いて歐羅巴全體を襲つた價格革命であつた。ネエデルラントに於いては、この世紀の半ば頃からその影響を蒙り始めた。しかもこの結果としての賃銀の引上げも、物價騰貴の影響の一部のみを償ふに過ぎなかつたのである。いま一四六七年乃至一五六〇年のミュンスタア管區に於ける物價指數と賃銀指數とを次に示さう。これ等はいづれも一四六七——一五〇〇年の平均を一〇〇とせるものである(11)。先づ物價指數から見ると、

	一五二〇年	一五二一〇年	一五二二〇年	一五二三〇年	一五二四〇年	一五二五〇年
耕作物	八八	一〇一	一一三	一三八	一四三	一七九
葡萄酒	九九	一一五	一二七	一三四	一四一	一三五
馬及家畜	一〇〇	一〇〇	一〇四	一二四	一四七	一六二
牧畜副産物	八九	一一七	一二二	一二五	一五〇	一六五

十六世紀ネエデルラントのカルヴァン主義

一五五 (九一九)

石工職人	夏期	七八	—	八六	一一三	一二四
日傭労働者	夏期	九八	一一八	九七	一〇一	—
	冬期	—	一〇四	九七	八八	—
織工	—	七九	八八	七四	八五	九一
鉄工	—	—	—	—	—	—
				一一二	一一五	一二三
						一二二

右の中、最後の織工と鉄工との賃銀のみが個數賃銀であり、他はすべて時間賃銀である(12)。

斯くの如き物價と賃銀との間に於ける上騰デムポの相違は、彼等をして不平を抱かしめるに十分であつた。そしてこの不平は屢、暴動の發生にまで導いたのであつた。特にこれは價格革命の影響を實際に體得し始めた一五五〇年以降に於いて瀾發したのである。然し乍ら前述の如く、彼等はあらゆる關係に於いて無産であり無權利であつた。しかも彼等が極めて雑多の要素から構成されて居たことは、少くともその當初に於いては、共同利害の意識の發生を妨げ、またその相互の間に組織を結成することを阻止した。従つてそれ等數多くの暴動も、その結果に於いては何等實效を齎らすものではなかつたのである。事實それ等は屢、可成りの狂暴さを伴つたのであるが、いづれも極めて短時日の中に鎮定されて終ふのであつた。

以上の他に尙吾々は、資本主義的諸關係の侵入による支配階級内部の分解作用の一分野として、貴族の解體を擧げねばならない。先づ一部分の貴族は、新しい經濟條件に順應して、實際惠まれた經濟的地位を利用し、市場關係と密接な關係を結んだのであつた。彼等は、ブルジョア的な空氣とイデオロギイとに染んだのである。然るに他の部分の貴族は、殆ど經濟に従事せず、古い半封建的な關係を維持して、國王の寵愛や氣輕な官仕へによつて裕福に

ならうと考へ、収入の多い教會の職務に就いたのであつた(13)。

斯くの如き新しい階級關係こそ、十六世紀の謂ゆる經濟革命當時に於けるネエデルラントに見られるところのものであつた。斯くの如くに中世傳來の階級の地位は變革した。そして新階級が舊階級と相並んで存立したのであつた。このことは、宗教思潮の如何なる變化のうちに現はれて居るであらうか。

(11) Earnst Basch, *Hollandische Wirtschaftsgeschichte*. 1927. S. 1-3.

(12) H. Pieme, *The Place of the Netherlands in the Economic History of Mediaeval Europe*. in: *The Economic History Review*. Vol. II. No. 1. p. 31.

(13) 東部地方に於いては、十七世紀及び十八世紀の前半に於いても隸農が多數存して居た。(Basch, op. cit. S. 50.)

(14) Richard Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger: Geldkapital und Kreditverkehr im 16. Jahrhundert*. Bd. II. Die Weltbörsen und Finanzkrisen des 16. Jahrhunderts. 3. Aufl. 1922. S. 5-8.

(15) Henri Pieme, *Belgian Democracy: Its Early History*. Trans. by J. V. Saunders. 1915. pp. 205-6.

(16) *Ibid.*, pp. 208, 209.

(17) *Ibid.*, p. 210.

(18) *Ibid.*, p. 213.

(19) *Ibid.*, p. 212. 一定の生計の途、或は定つた住所の無い人民大衆は、如何なる生計の道も、如何なる生活分野も、すべて無数の權利によつて閉ざされて居た社會に於ける封建制の没落によつて、當時、甚しく増大した。すべての發展せる國々に於いて、十六世紀の前半程、浮浪者の數が多かつたためしはない。これ等の浮浪者の一部は戰時になると軍隊に參加し、一部は田舎中を乞食して廻り、他の一部は都市に於いて日傭労働及び未だ同業組合組織の出來て居ない仕事によつ

て、糊口をすこして居たのであつた。(エンゲルス、ドイツ農民戦争、改造社版全集四卷、二九〇頁)

(10) エンゲルス、前掲頁。

(11) Georg Wiebe, Zur Geschichte der Preisrevolution des XVI. und XVII. Jahrhunderts. 1895. S. 383.

(12) Ibid., S. 335-8. より算出。

(13) ボクローフスキイ監輯、山田幸夫譯、初期ブルジョア革命史、二四一五頁。

三

中世の文化は、周知の如く、根源的に神學的性質のものであつた。そのすべては神學に於いて行はれて居た原則に従つて取扱はれて居た。「教會の教義は同時に政治上の公理であり、聖書の文句は孰れの裁判所に於いても法律の力を持つて居たのである。獨自の法律家階級が樹立した後に於いてすら、法學は尙依然として永い間神學の後見の下に留まつて居たのである。斯くの如き知的活動の全領域に於ける神學の優越は、同時に、既存の封建的支配の最も一般的な總括者及び裁可者としての、教會の地位から生ずる必然的結果であつたのである。これを以つて、封建制度に對して向けられた一般的攻撃のすべては、特に教會に對する攻撃は、即ちあらゆる革命理論、社會理論、及び政治理論は、同時に主として神學的異端たらざるを得なかつた」。このことは、いま吾々が顧みつゝある十六世紀のネエデルラントに於いても、何等異るところはなかつた。即ちそれは、その時代に於いて分化せることが漸く顯はとなつた舊階級や新階級やの利益及び要求が、宗教的外衣の下に隠されて、そして宗教的な旗印を掲げて問題となつたからである。

マルティン・ルウテルがカトリック教會の教義や憲法に反對して始めて起つたその翌年、はやくもネエデルラン

トに於いては、國際都市アントワープにその主義が導入され、次いでこの地から各地方へとそれは廣められたのであつた。然し乍ら、周知の如くにルウテル主義は、その本質に於いて中世的社會理論の一變形に外ならなかつた。ルウテルの教説の基礎は一部分は聖書であり、一部分は人々が未だ富によつて墮落せしめられて居なかつた自然状態に就いての漠然たる概念であり、一部分は到るところに傳播して居た商業文明に對する一般的抗議であつた。それはその前の二世紀間の商業的發展を異教主義に再び陥つたものとして斥けるものであり、商人や金融業者による社會征服に對する彼ルウテルの態度は、宗教の商業化に對する彼の態度と同じであつたのである。彼は既存の教會の精神的弛緩は憎んだが、自分と從屬との原理を有する社會的階級組織を受け容れた。それは國家にも、また社會にも反抗するものではなかつたのである。然しこの保守主義にも拘らず——それを吾々は、彼の價格に關する傳統的教義の繰り返し、或は高利問題に對する・教會法學者が利子と賃料徵集權購入とに分つて實際的必要に讓歩して居たことの咎め立て等の中に容易に見出すことが出來よう——、そしてまた彼の見た基督教社會は新興ブルジョアジイを入れる餘地の無いものであつたにも拘らず、ネエデルラントのブルジョアジイは、カトリック教會から離れてこのルウテル主義を信奉するに至つたのである。

と云ふのは、ルウテルは説く。「確かに、外部的事物の中には、それ等が如何なる名義を以つて呼ばれようとも、基督教的正義即ち自由を作り出すに當つて如何なる影響でも及ぼすものは絶對に無い。生、正義、基督教的自由には、一つのもの、そしてたゞその一つのもののみが必要である。それは、神の最も神聖な言葉、即ち基督の福音である」。この言葉はルウテル直系の人々によつて強調され論理的に押し進められて、善行のみならず聖禮典や教會そのものをも不必要ならしめるに至つたのである。救ひは、心に現はれる恩寵の作用によつて、そしてそれのみ

によつて與へられるのであるから、個々の靈魂とこれを作る神との間に介在して居たところの、宗教組織の全構造——神から委ねられた教職政治、體制的諸活動、諸制度——は、行ひの宗教の胃濟的な些事として棄て去られる(5)。中世的な慈善や、友愛團體や、托鉢教團や、祭典や、巡禮は拒否される。莊麗な、しかもその反面に於いて煩雜な教會制度は全く無益なものに過ぎない。それを有することなくとも、基督教徒は、聖書と自分自身の良心の中に、十分な案内者を持つて居るのである。曰く、「私は何を必要とするのではなく、私の信仰で十分なのである」(6)。斯かる教義は、當時カトリック教會によつて様々な宗教的義務と束縛とを課され、またその僧院の享有する租税免除を利用した生産物と競争することを餘儀なくせしめられ(7)、これ等に對して不満であり、排他的な僧侶階級制度の撤廢を欲求して居たブルジョアジイによつて容易に受け容れられるところとなつたのである。

この永く保持せられ來た傳統的信仰が一度破壊せられるや、更に他の激烈なる教義の誘入を惹起したのであつた。それは再洗禮派と呼ばれるもの、チュウリッヒに於けるツウイングリの改革運動を以つて尙不徹底なるものと做し(8)、全然カトリック的要素を一掃し現存社會關係を打破して使徒時代の自由を回復せんとする、そして意識的體験的要素のみを重んじ、従つて無自覺的な小兒洗禮を無効とし再洗禮の必要を説くものであつた。メルヒオル・ホフマンによつて一五二九年エムデンに齎らされて後、それは直ちに北部諸州に、ブラバント、フランダース、リムブルクに急激に擴まつた(9)。その教義の單純さと、その啓示的神秘主義とは、教會と國家との二重の抑壓の下にあり、經濟的不安定の裡にあつた下層市民のカトリック教會反對の氣運にまさに投ずるものであつた。彼等が教へられたところは、貧困と抑壓とが存し社會的區別の上に基かれた既存社會は破壊せられねばならぬこと、その廢墟の上に、平等と正義と愛と慈善とのみが在る新エルサレム王國が建設せらるべきことであつた。而してその歡ばしき

將來と彼等が現在營む生活のみじめさとの間の著しい差異を顧みた彼等にとつて、縱令ホフマン自らは暴力行使を説くことなかつたとは云へ、やがて神の國に近づかんが爲めにこの手段に出づべきことはたゞ時間の問題でしかなくあつた。しかもこの動向に一五三三年來、油はそゞがれた。それはヤン・マッティイスが、もはや神の國を徒らに待望すべきではなく、劍を以つてこれを建設せねばならぬと叫ぶに至つたことであつた。邪まなるものは根こそぎにされ、新エルサレムの城壁はそれ等の血を以つてかため著けられねばならぬ。僧侶を倒せ、そしてまた現存する一切の制度を去れ、と説かれるに及んで、その狂熱的運動はミュンスタアを中心として極點に達し、それは單なる一宗教問題の域を遙かに逸脱した性質のものとなつたのである(10)。

彼等に反對するものは、封建的關係の分子・後れた地主・自作農民・ギルド職人等より成るカトリック教徒は勿論のこと、新教徒さへもがこれに加はつたのである。政府は素より壓迫を加へた。ミュンスタアの攻圍と共に、一五三五年には再洗禮教徒を死刑に處す旨の布告が發せられた。そしてその年六月ミュンスタアの陥落を期として、彼等の革命的企圖は終りを告げたのであつた。と云つて再洗禮派が消滅したのでは全然ない。然しこの時以降それは、隣人の愛と個人の自由とに基き原始基督教復歸を目的とする穩順な信仰に改變し始めたのである(11)。然し乍らその轉化にも拘らず、尙長らくそれはルウテル派と共に、カトリック王フィリップ二世の禁ずるところとなつて居た。斯かるうちに、大約五〇年代に於いて、ネエデルラントには、新たにカルヴァン主義が普及し始めたのであつた。この時以降約一世紀に亘つて、ネエデルラントのカルヴァン派教會によつて説かれた教義は、然し乍ら、エルンスト・バインスの近業に従へば、利得機會と其の利用に對しての不斷の注視、その財産の管理に當つての責任意識と慎重さを教へるものであつたにも拘らず、尙未だ不完全なる・資本主義の論理(eine recht unvollkommene Ethik

主義者の無限なる義務として、不斷の勤勉なる労働が説かれたのであつたが、然し休みなき労働が要求されたのではなく、また營利義務は甚だ制限されたのであつた。即ち職業(Beruf)は、先づ第一に隣人の愛の手段として扱はるべきものであり、その後に於いて始めて私利追及の手段であつたのである。とは云へ私利の許さるべき高さは定められなかつたので無く、それは生活必要の標準によつて制約されたのである。即ち欲求充足の原理が、カルヴィン主義信奉者の營利努力を抑止したのであつた。甚だ強い願望や意欲は、それが道徳的危険の源となるからのみでなく、神慮に對して不信と驕慢とを意味するが故に、これは拒斥されたのであつた(13)。

斯くの如くネエデルラントに入り來つたカルヴィン主義の最初の形態は、トオニイによつてカルヴィニズムの本來の要求と做されたところの嚴格な干渉主義と總括さるべきものに外ならなかつた(14)。カルヴィン主義者にとつて、世界は神の尊嚴を表示するやうに定められ、基督教徒の本分はその目的の爲めに生活することに在る。基督教徒の任務は自己の個人的生活を訓練するに在ると共に、聖化された社會を創造するに在る。教會、國家、社會は、個人的救ひの手段になるとか、基督教徒の現世的必要に仕へるとか云ふ許りであつてはならない。それはキリストの國でなければならぬ。其處では、個人的諸義務は、自分達は常に偉大な監督者によつて見られて居るといふことを意識して居る人々によつて遂行され、その全構造は嚴格な且つすべてを包含する規律によつて墮落から防がれて居るのである(15)。斯くの如くその理想とするところは、忍耐強い労働によつて自己の品性を訓練すること、神に受け容れられる奉仕に身を捧げること、同時に意識するところの冷靜な眞面目さを以つた人々が、富を求め、る社會であつた(16)。従つてそれは、祈りによつてのみでなく、努力及び労働によるこの世の聖化、即ち行動によつ

て求めらるべきものである。それは個人的功績を無視するにも拘らず、甚だ實踐的であつた(17)。

カルヴィン主義の指導者は、經濟生活を道徳化しようとする宗教の要求を放棄したのでは決して無かつた。彼等も亦、生活を道徳化しようとする關心したのであつたが、その場合対象となる生活が謂ゆる商業文明の諸特徴を以つて當然のものと考へて居る生活であつたのである。即ち彼等の教えは、斯かる状態に適用され得んが爲めに工夫されたものであつた(18)。この故に、カルヴィン主義は、主として都會に於ける運動であつたといふ特徴を備えるのである。即ちその指導者は、その教えを勿論排他的にはなかつたが、尙第一に商工業に従事して當時に於ける最も進歩的な要素を形成して居た階級に向つて語つたのであつた。その場合、彼等は當然のことながら、資本の必要、信用及び銀行業、大規模の商業及び金融、その他實業生活の實際的諸事實に對する腹藏なき認容から出發した(19)。

これは斷るまでもなくルウテルと著しき對照を爲す相違である。彼等はルウテルの如くに農民や神秘家の眼を以つて經濟生活を見ることなく、また中世の神學者によつて或はルウテルによつて、Ehre、Erb und として辛うじて非難を免れたところの、交易及び金融の利潤を、労働者の所得や地主の地代と同じ水準に置いたのであつた(20)。たゞ彼等にとつては、この合理的な利潤が、自然的正義と神の誠めによつて定められた量を超過しないやうに注意する義務を個人の良心に投げかけることが、第一の問題であつたのである。

斯くの如き教義は、近世初頭の經濟的繁榮さに對するその嚴格な干渉的態度にも拘らず、尙その周圍の實際的必然と妥協した態度の爲めに、カルヴィン主義は他の國々に於けると同じく、ネエデルラントに於いても特に商工業者間に、即ち當時の企業家、大商人の間に擴まつた。それ等の人々が當時、ネエデルラント・ブルジョア・アジイの中で最も敢爲的部分であつたことは斷るまでも無い。そしてまた彼等の間に普及したことは、當然のことながら、彼

等の支配下にある下層市民にも擴播する契機を爲した。しかもこの教義は、それのみに止まらず、貴族の中で青年的分子にも及んだのであつた。然しこの反面に於いてギルド職人には及ぶこと尠く、封建的土地關係の支配的な場所に於いては普及されなかつたのであつた。

(1) エンゲルス、前掲、農民戦争、二九五頁。

(2) R. H. Tawney, Religion and the Rise of Capitalism: A Historical Study, 1926, pp. 91, 89.

尙、ルツテルの非資本主義的態度にも拘らず、その謂ゆる俗人主義のうちに、資本主義的精神に發展すべき萌芽の存することを主張するものに、ヴェンナ、トルルチがあることは人の知ることもあらう。—— Vgl. Max Weber, Gesamte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. I, 1922, S. 63-71.; Ernst Troeltsch, Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen. (Gesammelte Schriften, Bd. I.) 1923, S. 575-7.

(3) Tawney, op. cit. p. 93.

(4) Ibid, p. 97. より引用。——「ここに我々は、内面的な靈的な人を取つて、これが義なる自由な基督者でありまた斯く呼ばれるために須要なものが何であるかといふことを知りたい。この際言ふ迄もないことであるが、外的なものは何ういふ名義の下にあるにせよ、決して人を自由にもしないし義ならしめることも出来ない。何故といふに人の義も自由も、またその反對の害悪も束縛も、之等は何れも身體的でも外的でもないからである。……さればたとひ身體が司祭者や聖職者のするやうに神聖な服裝を着けたところで、靈魂に取つて何の助けにもならない。身體が教會や聖所に在つたとしても無用であり、聖器物を扱つてもそれと同じく、また身體によつて祈禱をなし斷食し巡禮し、その他身體によりまた身體に於いて何時も行はれることの出来るやうなあらゆる善行を爲すとしても、同じく無益である。靈魂に義と自由とを齎らし與へるのは、それとは全く違つたところのものでなければならぬ。何故ならこれら上に述べた凡ての事、行ひと生活

とは、邪惡な人、欺瞞者と偽善家と雖ども之をもち且つ行ふことが出来るし、また斯様な事によつては、單なる偽善者の生ずる外何の意味も現はれないだらう。反對にまた身體が穢れた服裝をなし、穢れた場所に住み、食らひ飲み、彷徨し、祈禱せず、上に擧げた偽善者の爲す行ひを凡て缺いたとしても、靈魂に取つて何の障害にもならないのである。……靈魂は、それが生存し義であり自由でありまた基督者であることの出来る所の天にあつても地上にあつても、聖なる福音、キリストの説かれた神の言葉の外には、その所有するものは何もない。……靈魂は神の言葉以外のあらゆるものを缺くことは出来るが、神の言葉なしには他の何ものを以てしてもその役には立たない。けれども若しそれを有つて居れば、それは他の如何なるものをもはや必要たらしめない。……かやうに大なる恩恵を與へる言葉とは元來如何なるものであるか、また之を如何に用ひたらよいか。……それは福音書が包括してゐるやうなキリストについての説教の外には何も存しない。……神は諸君が諸君自身から、言ひ換へれば諸君の滅びの中から脱れ出ることの出来るやうに、諸君の前にその愛する子イエス・キリストを立て、その活ける慰めある言葉によつて諸君にかく言はしめ給ふのである。曰く、汝は堅固な信仰を以てキリストのうちに自己を委せ、敢然と彼に信頼すべきである。然らばその信仰の故に汝の凡ての罪は赦され、凡ての滅びは克服され、かくて汝は正しく眞實に平和に義とされ、凡ての誠めを充たし、凡てのものから自由になれるであらうと。それは聖パウロがロマ書第一章に「義とせられたる基督者はただその信仰によりてのみ生く」と言うてゐる通りである。」(石原謙譯、ルター、基督者の自由、岩波文庫、二六一—二九頁)

(5) Tawney, op. cit. pp. 97-9.

(6) 石原謙、前掲書、四〇頁。

(7) A. Conady, Geschichte der Revolution vom niederländischen Aufstand bis zum Vorabend der französischen Revolution. Bd. I, S. 30.

- (8) マン・ハント・ゲルツァー Vgl. Heinrich Wiseman, Darstellung der in Deutschland zur Zeit der Reformation herrschenden nationalökonomischen Ansichten. 1861. S. 71-4.
- (9) Pirenne, Belgian Democracy. p. 223.
- (10) Ibid., pp. 223-4.
- (11) Ibid., p. 224.
- (12) Ernst Beins, Die Wirtschaftsethik der calvinistischen Kirche der Niederlande 1565-1650. 1931. S. 72.
- (13) Ibid., S. 71.
- (14) Tawney, op. cit. pp. 112-8.
- (15) Ibid., p. 109.
- (16) Ibid., p. 105.
- (17) Ibid., p. 109.
- (18) Ibid., p. 105.
- (19) これに就いては、カルヴィン自身の次の言葉を顧みれば十分であらう。曰く、「如何なる理由があつて、何故に實業か
らの所得は土地所有からのそれよりも大きくあつてはならないのか。商人の利益は、彼自身の勤勉からでないとするれば、
何處から生ずるのか。」(Tawney, op. cit. p. 105. より引用。)
- (20) Ibid., p. 105.

四

上述の如く、概括的にネエデルラント・カルヴィニズムの勢力範囲が規定されるとは云ふものの、そのブルジョア

ジイの全部がカルヴィニズム歸依者であつたといふのではないことは勿論である。即ち上層ブルジョアジイの中には、カトリック教徒も依然として少数でなかつたのであり、例へばロッテルダムの大商人ヨハン・ファン・デル・フェッケンの如き、その著名なるものに屬する。また新興商業階級の中にも、表面はカルヴィン主義を奉じてゐるかの如くして、實際は無宗教であつたものも尠くなかつたのである。然し乍らこのことは、カルヴィニズムが彼等にとつて無縁なものではなくして、却つてそれが彼等の存在を強める作用を與へるものであつたことの擧證でなければならぬ。即ち商人にとつて企業家にとつてカルヴィニズムを縦令表面的にせよ信奉することは、彼等に利益を齎すものであつたことを示すものと云はねばならない。これを端的に云へば、この教義を以つて彼等はその支配下にある労働者、手工業者の懐柔手段としたのであつた。それ等に對する無制限なる搾取も、カルヴィニズムの教義を審判者としてこれを正當付け、またその苛酷さより生ずるそれ等の間に於ける不満も同じ方法に頼つて抑止したのである。斯くの如く、カルヴィン主義は新興ブルジョアジイにとつて全く利益ある福音と看做されたのであつた。

これに加ふるに、この教義が商工業地方の商人や企業家の間に擴まつた他の原因として、彼等の存在を脅かす西班牙カトリック王の政策があつた。それは特にフィリップ二世に於いてその度を強めた干渉政策である。この政策は結局西班牙支配階級の利益を第一として嚮導されたものに外ならなかつた。これによつて當然ネエデルラントの商工業は甚だ大なる打撃を與へられた。例へばこの政策の一端として現はれた西班牙海運業保護の如き、その最も著しいものであつた。そしてここに結成された反西班牙運動は、また反カトリック運動の色彩を帯びるに至つたのである。と云ふのは、アントワープの繁榮の原因としてこの都市の自由が擧げられて居るやうに、新興ブルジョアジイにとつてその存在の確立の爲めには、何よりも先づコスモポリタ的な空氣が必要であつたのである。それ故

に、通商上の理由からして、異教徒糾問の行はるゝ如きは全く反対であり、従つて異端糾問の苛酷なるカトリック教に反対する宗教に加はる自然的傾向が、彼等の間に存したのであつた(2)。ここに於いて、この教義が彼等の間に勢力を占めたことは當然と云はねばならないであらう。

然し乍ら、このことは、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義精神」といふマクス・ヴェーバーの劃期的著作以來有名となつたテエマの繰り返へしであるかの如く考へられてはならない。と云ふのは、筆者は、ロバートソンがその近業の全部に亘つて論證せる如く、理想型をたてんが爲めにヴェーバーが試みた謂ゆる社會學的方法に基く結論と、歴史的現象の發展を具體的に究明する一般經濟史家の研究とを、同一地盤に置いてその是非を論ずる如き意圖を有するものではないからである。如何にもヴェーバーは問題提起者として、その業績に輝かしさを加えて居る。そしてまた新教の經濟倫理が謂ゆる資本主義精神に影響を及ぼしたことは確かである。然しそれがこの精神を形成したものであるとは云へないであらう。寧ろ資本家の階段の勃興に直面して、その勢力が増大し行くのに直面した宗教イデオログが、尙も傳來的の支配的地位を維持せんが爲めに、そしてまたその勢力を擴張せんが爲めに、新興階級の要求に應じて必要なる限りの讓歩をその教義の上に行つたと見るべきものであらう。若しこのブルジョアジイが無視せられ得る程の勢力しか有しないものであつたならば、宗教思潮の變容は行はれることなかつたであらう。然るにその實勢力は到底これを無視することを許さぬところの甚だ大なるものであつた。それ故にこそ、教義の一部變容によつて彼等を受容することは、新教と舊教とを問はずそのいづれに於いても遂行されたのであつた(3)。このことが、教會の經濟倫理の世俗化運動の根源であつた。それはすべての教會が直面せねばならぬ問題であつたのである。

まさに、ここに本稿の最初に掲げたところの、行動の第一次性^{プライオリティ}なる命題の宗教思潮上に於ける具體的例證が横はる。またここにこそ、トオニイが英吉利に於ける新教、特にピューリタニズム自體が、その初期の形態と後期のそれと決して同一でないことを論證した功績が顯はにされるのである。このことはネエデルラント・カルヴィニズムに於いても眞實であつた。即ち大約十七世紀中葉までは、パインスの云ふ如く、尙それは不完全なる資本主義の倫理を説くものでしかなかつた。そしてその後^後に於いて、この教義は資本主義に適應するやうに發展し轉形したのであつた(4)。それ故に、ネエデルラントの經濟的發展は、十六世紀中葉に於けるカルヴィン主義の普及と期を同じうしてゐるのであるけれど、これは後者の爲めに前者が生じたのではなく、カルヴィン派教會の存在にも拘らずこの國の交易や商業は發展したと云はねばならないと、ロバートソンは説いて居る(5)。然し、ネエデルラント・カルヴィニズムはその初期の形態に於いては、如何なる程度に於いて不完全な資本家的なものであつたのであるか。その大要は既に一言したところであるが、以下に於いてこれを検討するに必要な限り、その教義の若干を採り上げて見よう。

その説くところに従へば、職業勞働(Berufarbeit)は人間の原罪に對する刑罰として命ぜられて居るものであつた。それは遵奉せねばならぬ現世的義務であつた。然し乍ら勞働するだけで十分なものではなくして、その勞働は、神の意志と調和し且つ一般の利益を目指す場合に始めて意味あるものとなつたのであつた。即ち *alibi inserviendo Deum glorificare* の實現可能性こそ、職業の合法性の標準たるものである。それ故に他人の困窮を利用して營業するところの例へば高利貸の如き職業、同朋に背徳を奨めて利益を得る娼樓やカバレエの經營者、或は俳優・職業的舞踏師・奇術師の如き娛樂を以つて勞働となし觀客を墮落せしめるもの、扱ては海賊の如き、これ等はすべて不名譽な職業とされたのである。然し乍ら進歩的神學者によつて所與の諸關係への適應が企てられ、職業の評價に際し

て、社会的必要と利益とが規準となされるに及んで、右の如き職業に差異を附することは消滅した。従つて農工商の中のいづれも、他に比してより高く評價せらるべきものでなく、同様に僧職も、通常、他に立ち勝つた職業であるとは考へられなくなつたのであつた。

カルヴィン主義者にとつて、その経済的活動の任務は、隣人の愛と欲求充足の原理によつて規定せらるべきものであり、彼等はその職業を、富まんが爲めに遂行すべきでないと思はれたのであつた。それ故に、中絶することなき且つ最も緊張せる労働、例へば日曜日の労働や夜業の如きは、基督教徒の生活内容を形づくり得ぬものであつた。然し乍らこの過度の緊張の他に、怠慢もまた許されなかつた。即ちその執れにせよ、極端を避けて職業労働を行はねばならぬ。基督教徒は、喜びと企業心と熱心なる勤勉とを以つてその仕事に従ひ、彼自身の利益を他者のそれ以上に注意し、賢明に且つ巧みにあらゆる提供せられた利得機會を利用し、また最大の注意を拂つて獲得せるものを處理すべきである。斯くの如くにして利益を得た者は神に忠實なることの現世的顯示であると看られ、同様に彼自身の不注意によつて損害を蒙つた者は忠實さの缺けて居るものと做された。しかも人間は財産を獲得してもその所有者たるものでなく、彼は神によつて委ねられたるその管理者たるに過ぎないのである。従つて彼は儉約して處理せねばならない。節度を以つてその保持に當り、合法的に増殖を計らねばならない。そして特に商業に對して、最大の注意を拂ふべきことが言はれた。例へば、十分な擔保なしに金錢を貸すことは義務忘却であると做されたのである。財産を失ふ憂れある活動、偶然によつて利得なり損失なりが定まる活動の一切は避くべきものであつた。また企業の破綻によつて全く破産することを避ける爲めに、資本家は其の貨幣を一つの企業に投すべきでなく、各種の企業に分割投資すべきことが助言されたのである。更に食欲に陥ることなく、しかもひとは無益にして不適當なも

のに對して支出を爲すことを抑止すべきであつた。また奢侈的浪費と耽溺、華美なる祭禮、高價な衣服、宏壯なる居室等々に對しては、すべて金錢を投することを許されなかつたのである。

斯くの如くに職業労働による収益の管理と使用との實踐的諸方策が説かれたのであつた。これ等は、ネエデルラントに於ける初期カルヴィニズムの特徴を形成する教義であつた。そしてこの全體を通じて流れて居るところの、欲求充足の原理によつて營利努力が抑制されて居る點が注目されて、更に、この教義の中に封建的傳統たる謂ゆる教會至上主義が濃く織り込まれて居ることに注意が注がれて、以つてこの時代のネエデルラント・カルヴィニズムは「未だ不完全なる・資本主義倫理」と認められて居るのである。如何にもその外部に現はれた限りに於いては、この経済倫理は、「完全なる資本主義倫理」と云ひ得ざるものである。それは確かに當時に於けるネエデルラントが資本主義的社會の確立にまで到達して居なかつたこと、尙未だ十分に封建的地盤を残して居たものであつたことを反映するものと云はねばならない。然しましたこのことは、當時のネエデルラントが完全なる資本主義の段階への一歩手前にあつたことを意味して居るのであり、そしてまたそれは右の宗教思潮の上に既に現はれて居るのであつた。

と云ふのは、右の教義を一貫する主流として直ちに認められることは、そのすべてが勤勉と儉約とを以つて色づけられて居ることである。この特徴は斷るまでもなく、資本の蓄積の一要素たるものである。即ち斯かる主調を持つ教義は、この時代が資本の本源の蓄積の段階にあつたことを部分的にはあるが、然し明瞭に反映せるものであつたと云ふことが出来るであらう。そして更にこれを裏書きするものとして、このネエデルラント・カルヴィン派神學者が微利問題に對して採つた態度があるのである。簡単に云へば、彼等は過度の高利の要求は、これを公正價格の決定を侵犯するところの呪ふべきものとして禁じた。然しそれ以外には、貨幣の退蔵は貨幣所有者が利益を自

ら放棄することに等しく、それは愚行といふべきものであり、また道徳的見地からすれば許容し難きことであるとさへ云つて、利子徴収を認めた。そしてそれは更に義務であるとさへ看做されるに至つたのである(8)。斯くの如くに、これ等神學者の説くところは、蓄積を妨ぐるものはすべて神の名に於いて罪であると做されるものであつた。それ故にこの宗教思潮は、その根據とせる十六世紀ネエデルラントの經濟的地盤が過渡的段階に在つたことからして、それを反映して、資本の本源的蓄積の時代にまさに照應した觀念形態であつたと云はねばならないのである。斯くの如く概説されるネエデルラント・カルヴァニズムは、曩に再洗禮派によつて道付けられたところの、社會不滿を表現する手段として政治的領域に移された。そしてそれはネエデルラント・ブルジョア解放の闘争の爲めの要具として使用されたのであつた(9)。然しそれ等の経過の叙述はこれを他の機會に俟つことにする。

- (1) Basch, op. cit. S. 8-9.
- (2) H. M. Robertson, *Aspects of the Rise of Economic Individualism: A Criticism of Max Weber and his School*, 1933, p. 174.
- (3) Vgl. Groethuyzen, op. cit. Bd. II. Die Soziallehren der katholischen Kirche und das Bürgertum, 1930, S. 10-1
- (4) Beins, op. cit. S. 72.
- (5) Robertson, op. cit. p. 173.
- (6) Beins, op. cit. S. 29, 28, 30-1, 33-4
- (7) Ibid, S. 40, 43-4, 44-5.
- (8) Ibid, S. 62, 64.
- (9) Pirenne, *Belgian Democracy*, p. 225.

最近經濟文献

(昭和九年五月十八日調)

〔理論經濟學〕

- *社會科學の方法論 伊藤安三著 菊判 敬文堂
- *現代經濟學概観 シュランニール著 堀尾夫・三谷友吉共譯 菊判 五〇九頁 日本評論社
- *社會經濟と統制經濟 武田鼎一著 菊判 敬文堂
- *厚生經濟論(新經濟全集四) 高木友三郎著 菊半截: 日本評論社
- *貨幣論 カール・カウツキー著 向坂逸郎・岡崎二郎共譯 菊判 二七六頁 改造社
- 政治と經濟(外國の新聞と雜誌、三〇七號、昭和九・五・五、一五—四〇頁) グスタフ・ストルナー 岡島 錦治
- 經濟と道徳との合致(四・完)(法と經濟、一卷五號、昭和九・五、四八—七四頁) 山田勝次郎
- 地代論は如何に研究すべきか(歴史科學、三卷六號、昭和九・五、二—一六頁) 高田 保馬
- 節約の矛盾について(經濟論叢、三八卷五號、昭和九・五、一三—一三七頁) 高田 保馬
- リカルドオの比較的生産費について(經濟論叢、三八卷五號、昭和九・五、一〇〇—一二二頁) 朴克 采

最近經濟文献

一七五 (九三九)

- 擴張再生産表式について—織田學士に答ふ—(經濟論叢、三八卷五號、昭和九・五、一三六—一四二頁) 柴田 敬
- 現段階の資本蓄積とその跋行性(經濟往來、九卷五號、昭和九・五、七九—一〇六頁) 豊崎 稔
- 長期的景氣波動と資本蓄積の機構—併せてコンドラチエフ長期的景氣波動論の批判—(經濟學論集、四卷四號、昭和九・四、九〇—一二九頁) 田中 精一
- 歸屬理論と限界生産力説—純粹經濟學の二問題—(經濟學論集、四卷四號、昭和九・四、二八—八九頁) 安井 琢麿
- 經濟學の一般的問題としての國防と經濟(經濟往來、九卷五號、昭和九・五、一三一—五二頁) 馬場 敬治
- * Beker, M.: Die industrielle Differential-Rente. o. O. 1933. 62 S. Mannheim Ha II, Diss. von 1932.
- * Eisler, K.: Vom "Volksvermögen". Eine erkenntnistheoret. Studie. Jena. 1934. 66 S. M. 3,80.
- * Fallon, V.: Principles of social economy. t, rev. by Bert C. Goss. New York. 1933. 600 p. \$ 3,20.
- * Grijdt, K. Kerschmann, J.: Lo stato come soggetto economico, studi metodologici sull' economia politica. Pavia. 1933. 42 p.
- * Hodgson, J. G.: Economic nationalism. New York 1933. 208 p.